



国内外における青少年の薬物使用の実態

国際交流や情報社会の進展に伴い、青少年を取り巻く乱用薬物は、
今まで以上に身近な存在になってきています。

薬物乱用・依存の問題は、国内だけでなく、国外の薬物事情の影響も受けるため、
国外の状況も含めた薬物使用実態の把握は、将来の流行の備えや薬物乱用問題の対処を検討する上で重要です。
本冊子では、国内外における青少年の薬物使用の実態についていくつか紹介します。

本冊子のご利用方法

- 本冊子は青少年の薬物乱用防止教育の関係者（教育関係者、保健医療関係者、行政関係者など）の方々にご活用いただくために作成しました。
- 本冊子は令和2年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）の一環として作成されました。
- 本冊子に掲載している図表の一部は、各調査実施団体が公表している全国学校調査に関する報告書を参照し作成しています。本ページの下方に、本冊子で参照した各国の全国学校調査の概要を示しています。
- 本冊子を引用する際には、次のように表記してください。
「国内外における青少年の薬物使用の実態」令和2年度厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）

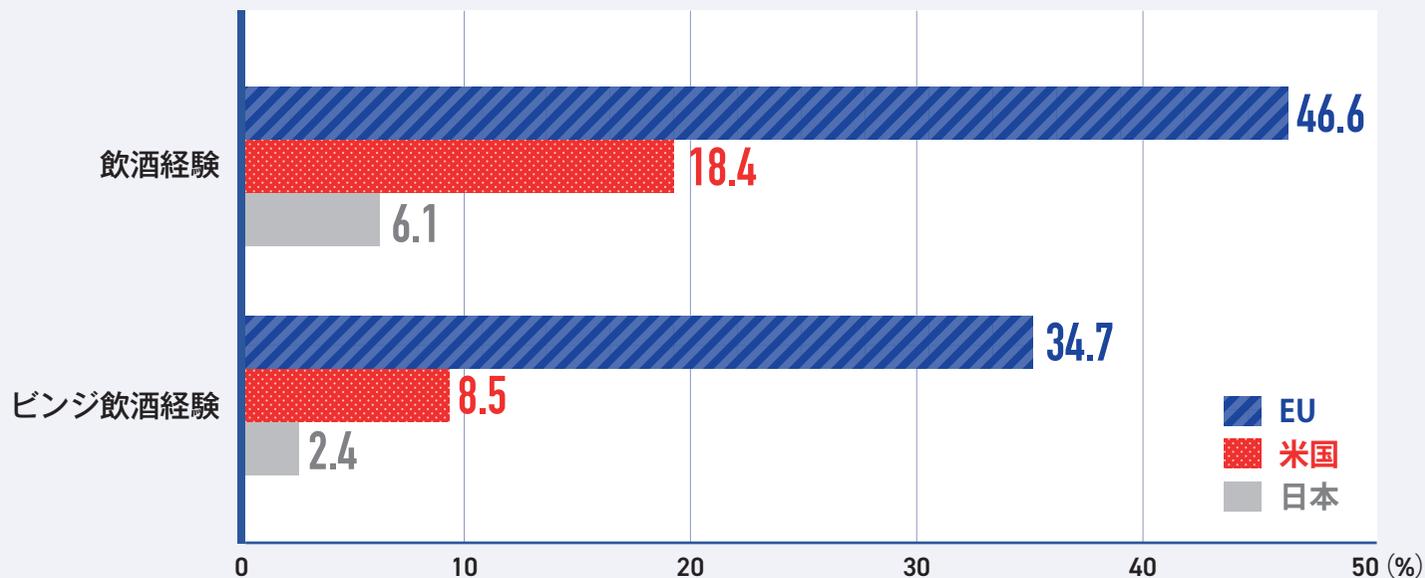
調査名（参考 URL）	調査地	調査年	対象
薬物使用と生活に関する全国高校生調査 https://www.ncnp.go.jp/nimh/yakubutsu/report/index.html	 日本	2018	高校生
Monitoring the Future Survey http://www.monitoringthefuture.org/pubs.html	 米国	2020	学生： 8 年生(13 歳 -14 歳) 10 年生(15 歳 -16 歳) 12 年生(17 歳 -18 歳)
European School Survey Project on Alcohol and Other drugs http://www.espad.org/espad-report-2019	 欧州連合(EU)	2019	学生：(15 歳 -16 歳)

01 ビンジ飲酒とは？

国内外において短時間に多量のお酒を飲む「ビンジ飲酒」の経験があると回答した生徒がいることが報告されています。

日本においては過去30日間に飲酒経験のある生徒のおおよそ3人に1人が、ビンジ飲酒の経験があると回答しています。青少年の「ビンジ飲酒」は、アルコール急性中毒や事故・怪我、違法薬物の使用との関連が報告されている非常に危険な飲酒様態です。

図1. 国内外の青少年における飲酒経験率
およびビンジ飲酒経験率（過去30日間）



ビンジ飲酒とは
一回の飲酒機会^{*}に
多くのお酒を飲むこと。
※例えば、2時間くらいの飲み会

〈ビンジ飲酒とされる飲酒量の目安〉



(体格や代謝の関係で調整)

EU：学生（15-16歳）、米国：学生（10年生：15-16歳）、日本：高校生 ※米国のデータは、過去2週間のビンジ飲酒経験率を示す。

<参考>Inoura S, Shimane T, Kitagaki K, Wada K, Matsumoto T. Parental drinking according to parental composition and adolescent binge drinking: findings from a nationwide high school survey in Japan. BMC Public Health. 2020;20(1):1878. <http://doi.org/10.1186/s12889-020-09969-8>.

02 最も乱用されている違法薬物は？

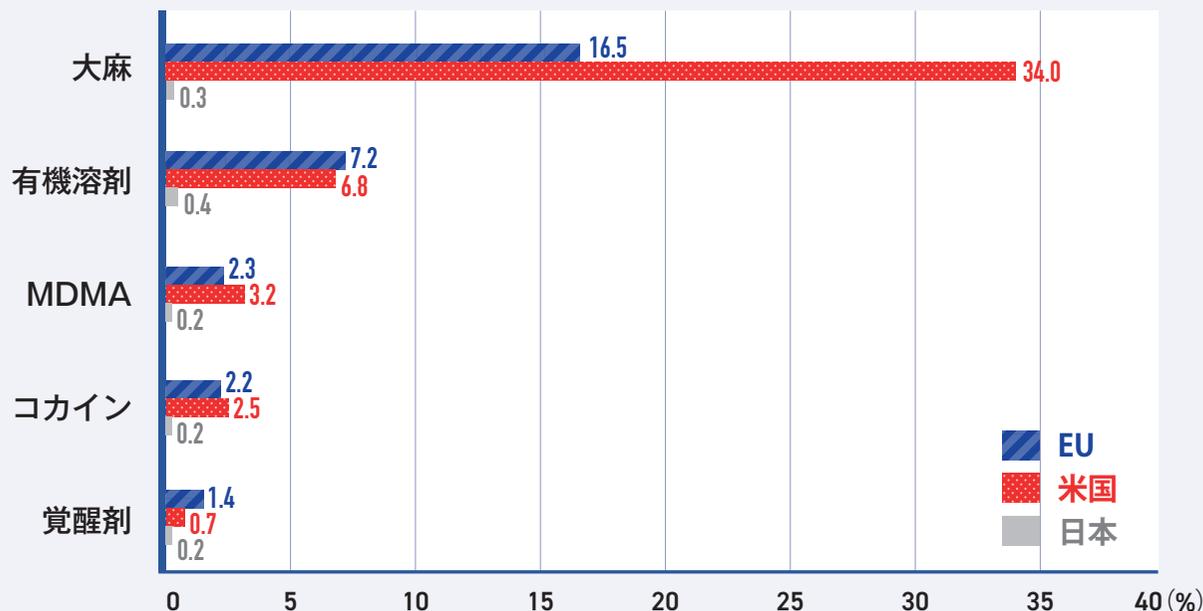
世界で最も乱用されている薬物は、大麻であることが報告されています。

EUでは、おおよそ6人に1人、米国では、おおよそ3人に1人の生徒が、生涯に大麻の使用経験があると回答しています。

日本は欧米諸国と比較して、大麻を含む違法薬物の生涯経験率が低いことが報告されています。

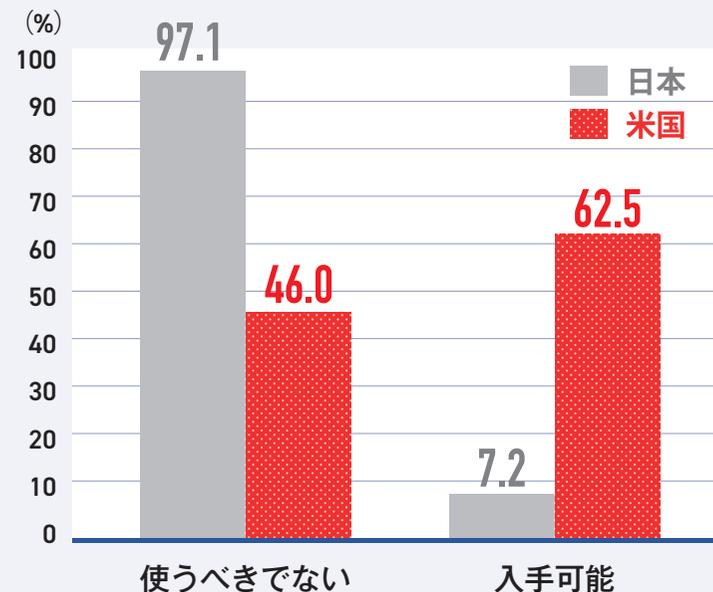
また、日本では米国と比較して、「大麻を使うべきでない」と回答した生徒が多く、「大麻は入手可能である」と回答した生徒が少ないことが報告されています。日本において違法薬物を使う青少年が少ない背景にはこうした考えや状況が影響している可能性があります。

図2. 国内外の青少年における違法薬物の生涯経験率



米国：学生（10年生：15-16歳）、EU：学生（15-16歳）、日本：高校生

図3. 日本・米国における青少年の大麻使用に関する考えと入手可能性



日本：高校生、米国：学生（10年生：15-16歳）

03 咳止め薬・風邪薬の乱用とは？

国内外において青少年による市販薬の乱用[※]が問題となっています。

※ここでいう市販薬の乱用とは、市販薬（咳止め薬や風邪薬など）を治療以外の目的で使用することや用法・用量を遵守しない不適正な使用。

日本では精神科で治療を受けた10代患者において、市販薬を「主たる薬物[※]」とする患者の割合が増加しています。

※本冊子でいう「主たる薬物」とは、患者の精神科的症状に関して臨床的に最も関連が深いと思われる薬物。

米国で実施されている全国学校調査では、一部の学年（8年生：13歳～14歳）において、過去1年間の市販薬の乱用経験がある生徒の増加が報告されており懸念されています。

図4. 全国の精神科医療施設における薬物依存症の治療を受けた10代患者の「主たる薬物」の推移

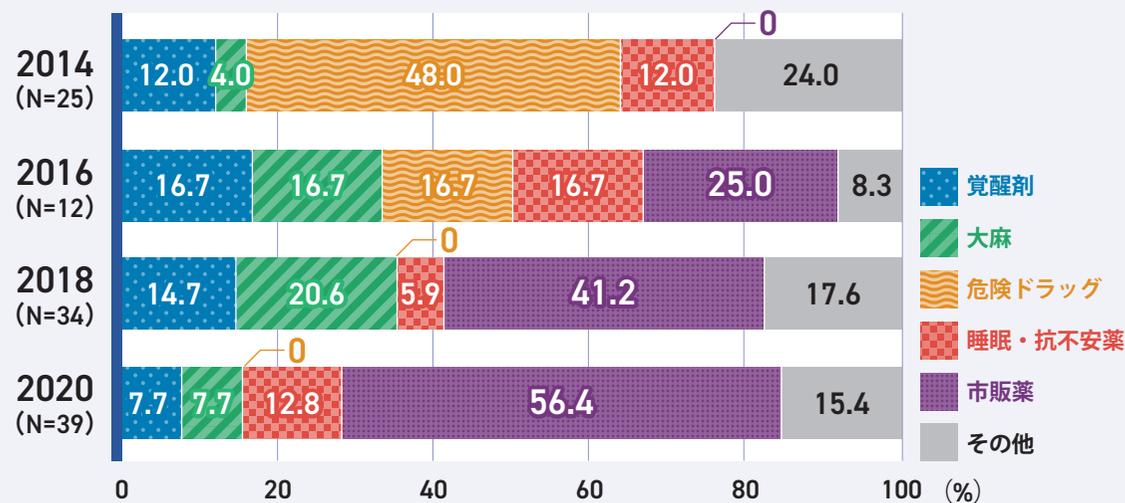
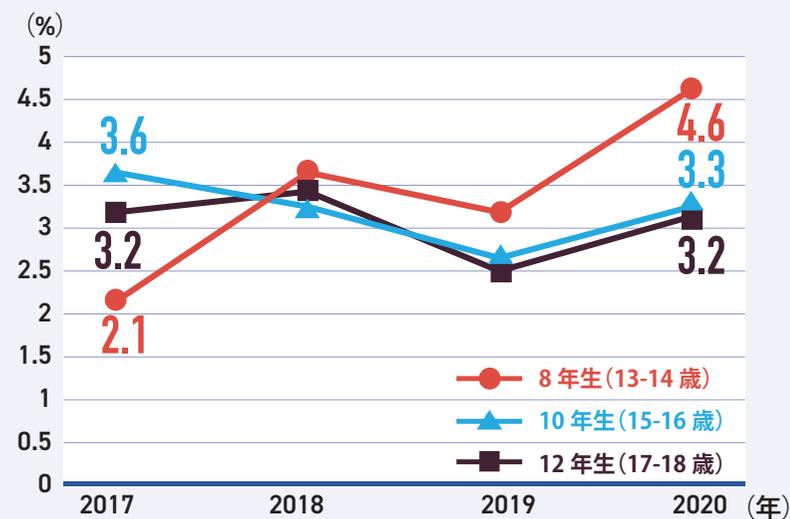


図5. 米国の青少年における過去1年間の市販薬（咳止め、風邪薬）の乱用経験率（生涯）の推移



参考：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（2020年）

04 睡眠薬や抗不安薬の乱用とは？

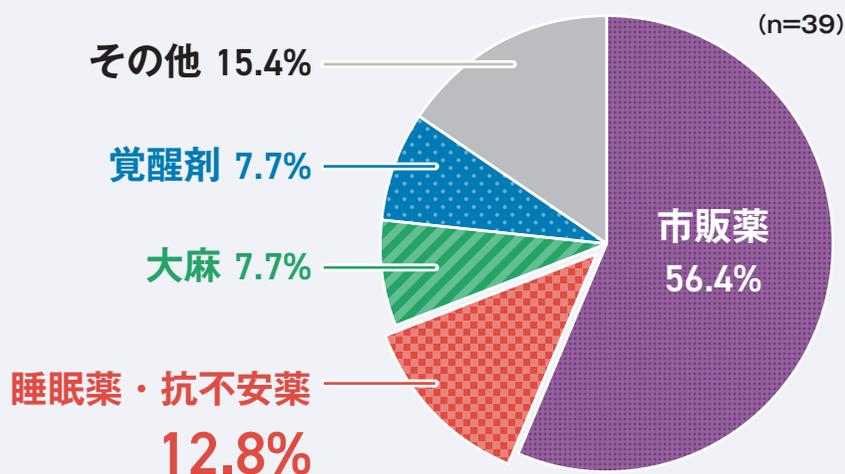
日本では精神科で治療を受けた10代患者において、市販薬の次に、睡眠薬や抗不安薬を「主たる薬物」とする患者の割合が多いことが報告されています。

欧米諸国においては、経年的な睡眠薬や抗不安薬の乱用経験がある生徒の増加は報告されていませんが、ある一定の割合で、それらを乱用した経験があると回答した生徒がいることが報告されています。

※ここでいう睡眠薬や抗不安薬の乱用とは：医師の処方箋や服薬指示がないにもかかわらず自己判断で医薬品を使用すること

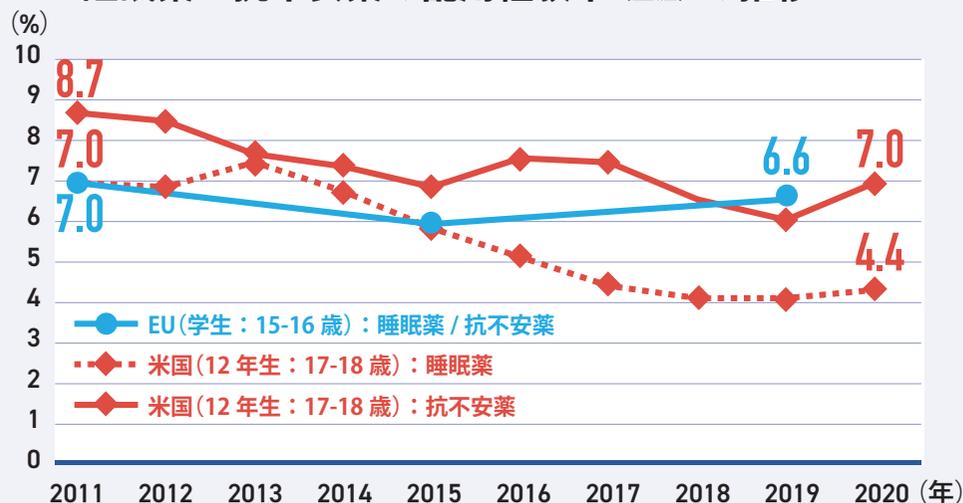
睡眠薬や抗不安薬の中には、用法・用量を守らず使用（乱用）することで、依存性を形成しやすい医薬品があります。医師や薬剤師の指示のもとで正しく医薬品を使用することが大切です。

図6. 全国の精神科医療施設における薬物依存症の治療を受けた10代患者の「主たる薬物」の割合



参考：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（2020年）

図7. 欧米諸国の青少年における睡眠薬・抗不安薬の乱用経験率（生涯）の推移



※EUのデータは、睡眠薬または抗不安薬の生涯経験率を示す。
※米国の睡眠薬のデータは、バルビツール酸系の睡眠薬を指す。